



弓と礼法の話（小笠原流）

株式会社 小山弓具会長 小山 雅司様

紹介者 斉藤 雅夫会員

孔子の教えの中に「君子の争い」があり、王様や上に立つ人には弓道を勧めます。弓道は相手が的であるため、成績は全てが己の責任で、遺恨が後に残りません。最後にはお酒を酌み交わしノーサイドとしましょうというのが孔子の「君子の争い」です。

弓道は日本の武芸十八般の一つです。その中でも、弓が一番で、馬・槍・剣・水術・・・と続きます。例えば東海一の弓取りと言え、天下一の弓取りであり、徳川家康を表します。

弓は鉄砲の出現により、闘いや狩猟の道具ではなくなりました。戦国時代、京都の蓮華王院にある三十三間堂の約 120M の本堂の軒下を、ひさし（日差）に当たらぬよう矢を射抜くことができれば天下一になり、下級武士は加増されお家安泰でした。

諸藩が名誉をかけて競い合い、特に弓矢を得意とした紀州藩と尾州藩はライバルとして名勝負を繰り広げました。藩の威信を賭けた対決だったようで、勝負に負けると、切腹をした人もいたため、中止となりました。遊郭の傍には、必ず弓引場があり流行ったそうです。私の先祖は弓引場に弓を卸して食い繋いだと聞いております。

明治維新の時に武道が廃止になり、日本人の精神が荒廃しました。そのため、国は「大日本武徳会」を設立し、武芸十八般の復活のため、各流派の宗家が京都に集結しました。

鎌倉時代より武士の礼法として江戸まで伝えられた教育に感銘を受けたのが、東郷平八郎でした。日露戦争時に、敵のバルチック艦隊の艦長が負傷し、日本の病院に運ばれましたが、お互いに国のために戦ったが、遺恨はない。早く傷を治し国に帰るよう苦労したそうです。この日本の礼節が世界中に伝えられ称賛されました。また、山本五十六元帥にもそういう逸話が多々あり、もののふ（武道）の心が息づいていることが、新渡戸稲造の武士道に書かれています。新渡戸稲造は、日本人には道徳教育に武士道があったからこそ、道徳的な行為が自然に行われていると言っています。

小笠原流 弓馬術は、鎌倉時代に初代の小笠原長清が源頼朝の糾法（きゅうほう）、弓馬術師範に命じられたことが始まりです。礼法はもののふ（武士）の作法で、立ち振る舞いの強化で、足腰の鍛錬にもなります。煙が立つがごとく立つ仕草、馬術に於いても、真っ直ぐな姿勢です。戦いの時には、重い鎧を着けて長時間戦います。自分が死んだら、仲間迷惑がかかるので、体を鍛えて長時間の闘いに備えました。そのため、小笠原流の教えでは骨格と筋肉を大事にしています。

小笠原家には『体用論』、『修身論』の先祖代々の秘伝書があります。体用論は身体のこと、修身論は心の教えです。

今の宗家は鎌倉時代の小笠原長清から 31 代目になりますが、小笠原家は二つあります。関ヶ原の戦いで小笠原家は秀吉側について敗れてしまいましたが、鎌倉幕府や室町幕府に仕えていたことや後醍醐天皇から昇殿を許されている家柄なので、潰すには惜しいと徳川家康が判断し、小倉の外様大名として 15 万石賜りました。そして、礼法の小笠原家は、徳川家の弓馬術礼法指南として徳川家に仕えることで 500 石の旗本になりました。しかし、小笠原弓馬術礼法の宗家として仕え、徳川家の御留流として一切世に出ることはなかったのです。

小笠原家は代々、弓馬術や礼法の教えを生計の手段とすることを禁じたため、別の職業をもっています。先々代の宗家は明治大学教授、今の宗家は金融機関に勤めておりました。

四代前の小笠原清務（きよかね）は、いずれ子どもを持って母になるであろうという女性を教育したいということで、学習院の女子や女子師範学校に礼法を開き、鎌倉時代のもののふ（武士）の礼法が女子の習い事になっていきました。

礼法とは、例えば、物を持っていく時には頭の高さ、神様に持つていくものは、頭の高さで運びます。食べ物は「目通り」、息がかからない目の高さです。布団など下に敷くものは「臍通り」、腰の高さで運びます。

お辞儀にも、神様への合手礼（ごうしゅれい）、偉い人に対する双手礼（そうしゅれい）、そして、折手礼（せつしゅれい）指建礼（しけんれい）など、相手の身分に応じたお辞儀があります。

また、小笠原流では、必ず自分の立ち位置を考えなさいと教えます。部屋の場合、上座、下座を考え、自分の地位や年齢を考えると自分の座る席が分かります。家主から座布団を出されて座るように促された時には、座布団を持って移動するのは失礼な事なので、座布団を動かしてはいけません。また、玄関に入って靴を脱ぐ時は、後ろ向きで靴を脱がず、正面を向いて靴を脱ぎ、それから靴の向きを直します。

そして、最近危惧していることは、テレビ番組で訪問する際に、外套を着たまま、帽子を被ったまま部屋に入る光景をよく見ます。外套は家の外で脱ぎ、裏側にして手にかけて入り、家の中にホコリを持ち込まない、雨の時はしずくを落とさないようにします。戦国時代でしたら、外套を脱ぐということは、武士が武器を持っていないという意思表示であり、相手を思いやる心を大切に人間工学的な動き。

これが 800 余年続いた弓馬術礼法、小笠原流です。

創立 1993年10月13日(平成5年)
例会日 毎週水曜日 12:30~13:30
事務局 〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-2-2
グランドマンション九段 906号
Tel: 03-3288-7300 Fax: 03-3288-7400
<http://tokyo-orc.jp/>
E-mail: ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp

例会場 ホテルグランドパレス
Tel: 03-3264-1111
会長: 永井 一史 幹事: 西村美智子
会報委員長: 松島 健
会報委員: 木村・木宮・佐々木・八木・山下